報告

湘南　国木田独歩記(二)

神野幸人

（会員　鎌倉市台）

二　逗子市の足あと

(1)柳　屋

明治二十八年十一月十九日

天曇り空気沈静の日なりき、横浜停車場に着したる頃は細雨来りぬれど大船にては止みたり。逗子停車場に柳屋の主人ありき、柳屋とは幽居のため其の一室を借り受けたる農家なり。今年夏、徳富家の借室したるも同家なり。薄暮信子と共に葉山に至り、厨具を買い求めて帰宅す。

天曇り風暗し。風涛の音、終夜枕頭に響きぬ。

逗子桜山の柳屋は、徳富蘆花、独歩が暮らしていたことで有名である。

独歩が去って一年を経ずして蘆花が柳屋の住人になって、その頃の柳屋と逗子の状況を小説「富士」の中に次のように描いている。

逗子は昔、豆師又は厨子と書いた。俗説には弘法大師の厨子があったから逗子とも謂ふともあり、弘法大師が行脚した時代にぶらさげたであろう頭陀袋の形をした平野である。海抜三・四百尺を超えぬ雑木山松山に三方を囲まれ、袋は北西に海へ口を開いて居る。

柳　屋

柳屋遠景

平野の主な創作者を、多胡江川、今は田越川といふ。田畑村中を悠々とくねり、潮がさすので、日の半分は逆に流れ、出水の時でもなければ滅多にはきはき流れることをせぬ、のんきな小川である。

（註　独歩「たき火」に出てくる御最期川とは田越川のことで、左記の古事による）

蛭ヶ小島の昔に思ひ比べ、敵のヒコバエを残す恐ろしさをしみじみ思い知った源右府頼朝が、平家の根を断ち殲（つく）す執念は深く、平家の嫡々重盛には嫡孫維盛には嗣子の六代御前は其齢十二のいたり気盛りを捉えられてすでに、沼津の千本松原で斬られる処を、頼朝には睨みの利く僧文覚がやっと命乞ひして、法師にしたが其内、頼朝は死し、文覚が朝廷に罪を獲て流罪になると、もう三十になった弟子の六代も「髪を剃り玉ふとも、心まで剃り玉はじ」と召し捕られ、到頭此の川辺で斬られた。

六百余年前青々と茂る川辺の芦に初秋の風わたる、陰暦七月二十六日の事である。

あわれを知る土地の子等は、多胡江川を御最期川と名をつけ、今も其月其日の記念の祭りをする。

逗子駅から葉山……三崎街道は、田越橋で此川を渡る。小田の向ふの小山の裾に、木立こんもりとした一堆の邸がある。石段を上れば、章魚（タコ）根を張った槻の老樹の下に苔蒸す五輪の石塔、それは六代御前を記念する石塔である。其上、一帯の松、雑木山は昔桜が多かった名残に、今も桜山の名がある。

麓をめぐって川に沿ひ街道に傍ふ人家の部落が字桜山である。……道傍一帯の桜の群れを抜いた三百年の老松一樹空に嘯（うそぶ）くあたりでまた街道に会ひ、富士見橋をくぐり尚一丁（約一〇〇メートル）を流るるともなく海に入る。

熊次、駒子がはなればなれにはじめて避暑に来た頃までは橋はなく、養心亭へは渡船で渡った。

富士見橋から川口までの間、川に街道に傍ひ桜山を背にして参差（しんし）とならぶ中程にゆったりと構えた大きな茅葺きが荒芽屋（あらめ屋）である。

「あらめ屋」はもと旅籠としていた頃の屋号さうな。北に三室、南に二室、八畳がずらり並んだ家づくりも、旅籠家業の昔を思はせる。今は主人は専ら農を業とし、八畳五室の母屋は避寒避暑の客に貸して、家族は母屋の

東に鍵形につぎ足した小さな板葺に住み、おかみが荒物店を出し、酒、酢、味噌、醤油くさぐさ売っている。

（中　略）

井は裏口直ぐ近く砂地に低い苔蒸した切石の井戸側、蓋にのせた一つ、釣瓶の竹竿が今は裸の無花果の木に立てかけてある。井は浅いが塩気は絶してなく軟らかい水である。……

（文中、熊次は蘆花、駒子は夫人愛子、あらめ屋は柳屋である。）

この柳屋も戦後、或る会社の寮に貸したが失火焼失（S29・4）今はなく、大谷石の石柱に「柳屋」と瀬戸焼きの小さな表札があり、それに連なる道傍に「蘆花・独歩・ゆかりの地」の記念碑が建っている。

この記念碑は、柳屋当主、石渡嘉一氏が亡父嘉兵衛五十回忌に際して、昭和三十六年二月五日に建てたものである。

喜兵衛は弘化元年（一八四四）生れで、独歩を逗子駅に迎えに出た頃は、五十二・三才の働き盛りのときである。才覚があった嘉兵衛は、田越村の村会議員にもなっている。明治二十三年に地方議会制度が出来るまでは、桜山・逗子・池子・山根・久木・小坪・新宿の各部落が独立していたが、地方議会制度発足とともに寄り集まって田越村となり、大正三年に逗子町となった。

逗子駅が開設したのは、田越村の生れる少し前の明治二十二年六月である。

逗子駅が出来ると間もなく葉山一色に、明治天皇の御用邸が設けられ、葉山はそれを中心として宮家・華族・政治家の別荘がつぎつぎに出来、葉山への入口になる逗子駅は利用度が高くなり、田越村でも海に面した桜山・新宿・逗子方面にも別荘が出来たり、旅館・貸別荘・貸間とて避暑・避寒の人を迎えるようになったが、まだ逗子駅は葉山のためにあるようなものであった。

独歩記「葉山に至り、厨具を求めて帰宅す」とは、当時の状況を如実に物語っている。

（2）散歩道

明治二十八年十一月二十五日

月光　海波　富岳　紅葉　朝夕の眺め今や吾を四囲す。

……（略）……

十二月四日

…前　略…

此日天気晴朗　晩秋の気透徹にして和適

富士山雪を戴きて相模湾の彼方に聳え　大磯　国府津小田原の海岸　微湛の中に隠見し　鎌倉の家屋點々指す可く　あかぬ眺めに飽かぬ散歩を得たりき。伊豆連山の彼方に沈む太陽を「あぶずり」の岸上に望み地球の自転を沈む太陽に見たり。

夜は名月　連夜なり。昨夜九時半過ぎ独り海に出でぬ。茲は御最期川の海に入る口　潮遠く退き去りて跡に海底の岩を現はすが　竜の如くに横たわるを見たり。

吾其の上に立ちたる時　月天井に在りて寂莫逗子を罩め　波の音浜にかすかに響き、月影水底に玉を沈め、俯迎して立つ吾を直ちに天地介立の清想哀感を誘ひたり。

明治二十九年一月十五日

過ぐる十二日には神武寺(沼間村にあり)に登山す。此の神武寺は其の眺望を以て名あり、三浦半島の西側の海を望み得るなり。相模湾は却って遠く、東京湾の水は却って近し、厳頭に坐して遠望し、神武寺にて晝食の馳走になりたり

一月十六日

本日午前散歩、小坪山道に登りて甲州地方遠山の清雪を望みぬ。

……(中略)

〈たき火〉

北風を背になし、枯草白き砂山の崖に腰かけ、足なげいだして、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつつ、沖より帰る父の舟遅しと俟つ逗子辺の童の心、その淋しさ、うら悲しさは如何あるべき。

御最期川の岸辺に茂る葦の枯れて、吹く潮風の騒ぐ、其根かたには夜半の満潮に人知れず結びし氷、朝の退潮に破られて残り、ひねもす解けもせず、夕闇に白き線を水際に引く。若し旅人疲れし足を此潯(ほとり)に停めしとき、何心なく見廻はして、何等の感もなく行過ぎ得べ

神　武　寺

きか。見かへれば彼処なるは、哀れを今も七百年の後にひく六代御前の杜なり。木がらし其梢に鳴りつ。

落葉を浮べて、ゆるやかに流るる此沼川を、漕ぎ上る舟、知らず何れの時か心地よき追分の節面白く此舟より響き渡りて霜夜の前ぶれをか爲しつる。あらず、あらず、ただ見る何時も何時も物言はぬ、笑はざる漢子（おのこ）の、農夫とも漁人とも見分け難きが淋しげに櫓をあやつるのみ。鍬かたげし農夫の影の、橋と共に朧ろに此川に映る。かの母、音もなくこれを掻き乱しゆく、見る間に、舟は葦がくれ去るなり。

日影仍ほ、あぶずりの端に躊ゆたふ頃、川口の浅瀬を村の若者二人、はだか馬の跨りて静かに歩ます。

畫めきたるを見ることもあり。かかる時浜には見わたす限り、人らしき影なく、引き上げし舟の舳に止まる鳥の、声を立てで翼打ものうげに鎌倉の方をさして飛びゆく。

……中　略……

伊豆の山燃ゆ、伊豆の山燃ゆと、童等節面白く唄ひ、沖の方のみ見やりて手を拍ち踊り狂へり。

……中　略……

今は海暮れ浜も暮れぬ。冬の淋しき夜となりぬ。此淋しき逗子の浜に、主なき火はさびしく燃えつ。

忽ち見る、水際をたどりて、火の方へ近づき来たる黒き影あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最期川を渡りて浜に出で、浜連ひに小坪街道へと志しぬるなり。火を目がけて小走りに歩む其足音重し。（明治三十年十一月作）

たき火

逗子の砂山草かれて
夕日さびしく残るなり
沖の片帆の影ながく
小坪の浦はほど近し

箱根足柄雪はれて
こがねの雲を戴きぬ
ゆふばえ映る汐ひがた
飛びかう千鳥こえ寒し

……中　略……

海暮れ野くれ山くれて
冬のさびしき夜となりぬ
逗子の浜べは人げなく
あるじなき火の影あかし

と見る、人あり近寄りぬ
足あと重したび人か
たき火を慕ふは袖ひぢて
かわす間もなかりしか

火影にうつる顔くろく
額にきざむ皺ふかく
六十路にあまる髯枯れて
衣のすそはやぶれたり

ふるさと遠くたびねして
ゆくゑも知らずさすらふか
ゆめは枯野にさめやすく
草をまくらの老の身か

……中　略……

ひぢじ衣もかはきたり
残りすくなに燃えつきぬ
たき火は炎かすかなり
おきな今はと杖とりぬ

小坪のかたは道くらし
ゆき去りかねしたび人は
あとふりかへりただずみつ
たき火のぬしをことぶきぬ

有明ちかく月さえて
逗子のうら人ゆめふかし
伊豆の孫やま火はきえて
いさり火のみぞのこるなり

里の童がたきし火は
さすらふ人の足跡は
とこしへの波おともなく
夜半のみち汐かき消しぬ

田越川は今もはきはき流れることもなく鏡の如く緑の桜山を映しているが、澱んだ川底には青い藻が繁り、又岸辺に茂った葦や、松林、三百年の老松もなく、護岸された岸辺には色とりどりのヨットが繋がれ、赤い富士見橋の下流に出来た巾広い海浜道路や渚橋、それに会社の寮やホテルとて高層建物が建って柳屋よりの遠望は一味ないものになった。又、田越川が逗子湾に流れる処は、海底の岩の代わりに、テトラポットが竜骨をなして満潮でもその姿をあらわしている。ただ昼夜をわかたぬ海浜道路の車音に寂莫逗子を覆めることはないだろう。

鐙摺(あぶずり)の浜辺には、終末処理場やヨットハーバー・葉山マリーナと、奇形な建物が出来て散歩道ではないが、田越橋より柳屋を通って渚橋までは夏の海水浴客を除くと旧道の静けさにもどり、二抱もある槻は一幹を根本より切られているが青々と枝をなし、その章魚根は六代御前の墓標を大切に抱いている。

柳屋周辺の地形は多少変化しているが、鐙摺岸上よりの冬の伊豆の遠景は今も変わらず絶景である。

相模湾の彼方、近くに江ノ島、遠くに伊豆箱根、大山の連山を裾に従えてそそりたつ富士、その頂上の白雪を墨染めにして真赤に燃え沈む入日の景は、独歩ならずともあかぬ眺めを今に残している。

ただ、ふるさと遠くたびねして、さまよう翁が小坪目指して歩いた砂浜には、湘南有料道路が長蛇の如く横寝して情緒も寂莫もかきけしている。

その道を苦々しく見て岩礁に建つ。不如帰碑の背の大崎山の荒崖は今も人を寄せつけず昔を大切に護っている。

大崎岬と飯島岬に挟まれた小坪の浜は、鎌倉、逗子より見えず、七百年前、頼朝が亀の御前と逢引きを楽しんだ秘境を今に伝えてくれたが、近年逗子マリーナとて海を埋立て宏大な敷地に十数層の建物十数棟、加うるに南洋植物を並木としている様は、鎌倉、逗子に不似合甚だしく、歴史と昔情をこわしているのは残念である。

神武寺は田越川を遡上すること一里、沼間にあり、天台宗で医王山と称し、本尊は薬師如来、開山は行基菩薩。開創は神亀元年(七二四)、一二〇〇年以上の歴史を持つ古刹である。(鎌倉最古のお寺、杉本寺も同じである。天台宗　開山行基)

現在、神武寺、鷹取山(一二四メートル)ハイキングコースと

なっているが、鷹取山は横浜市、横須賀市の市街化がすぐ近くまで迫り、横浜口より登る人が多いのか、神武寺本堂(茅葺四百年前建)より登る人は少ないようである。

小生が登った(八月五日)のは、東逗子方面からで天台宗、神武寺の大きな石柱があり、すぐ山道である。杉林の下、ササリンドウが漸く目を覚まして白い花を咲かせ、沼間の谷、池子の谷の双方で鶯がその鳴色を競っていた。

茅葺の山門、本堂は四百年前の建物で境内は静かな森となり静寂を今に伝え、詣でた人の襟を正さしめる。屋根伝いの鷹取山の小径はクモの巣が多く、タオルで払いつつ進む。

岩膚の露出に苔が緑し、巨石は小径を曲げ、その巨石を掴むよう老樹の根ががっちり抱えている。更にその根は数十本、人の肋骨を思わするように小径を横切っている。時には巨岩双壁となって径を狭め、上がり下がりの急坂をつくっている。独歩が歩いたのもこの径であろうに一言も記さずにいるのは、新婚の疲れか将又嬉しさか。

神武寺の山野渓谷が今に残っているのは(横須賀方面を除く)戦中は軍都横須賀の要塞圏にあり、戦後は三十数年に亘り米軍弾薬貯蔵地として池子の宏大な地域は日本人の立入りを今に拒んでいることと、横須賀線が計画されたとき、駅舎をいまの東逗子駅近くに予定されたのを、「陸蒸気のステーションをつくるなんてとんでもねーことだ。そんなことになれば部落の者が怠け者になるからまっ平御免だ。」と反対運動をして、俗化を避けた明治の沼間部落民の心根を今に継した人々のおかげであろう。

鷹取山に登って東、東京湾に連なる市街地や工場グレーン、煙突の白煙に霞む亡景と西、三浦半島に連なる緑なる山谷の幾連にも波打つ間に鶯鳴をきく蒼景に接し、陋習を大切にした人々に感謝す。下山の背に暁鐘の音これ又明治の時を告ぐ。

(3) 破　婚

明治二十八年十二月四日

先月十九日の幽居以来已に半月は経過したり。吾等が生活は極めて質素なれど極めて楽しく暮らしつつあるなり。質素は吾等の理想にして其の実効は倹約と時間の経済なり。

米五合に甘藷を加えて一日両人の糧となす。豆の外に用ふべき野菜少なし。時々魚肉を用ふれども、二銭若しくは一銭七厘の「あじ」「めばる」「さば」の如き小魚二尾を許すのみ。粗食といふのをやめよ。

粗食は美食より人を弱くするの実、極めて少なきなり。菜食の利は脳髄の明快にありと始めて知りぬ。

と、切りつめた生活は独歩の信条かもしれないが、豊かな生活に馴れていた信子には苦しいものであったろう。

二月　十二日　信子は満腹の愛と信とをわれにささげつつあり　われ已に生活の煩累を感ぜざる也　と満足感・幸福感・信頼感を記しているが、信子は内心すでに背信の情があったと思われる。

二十九年三月二十八日　約四ヶ月過ごした逗子を独歩の父が病気とて引き上げ、四月一日　潮田ちせの家で豊寿夫人との和解が成立したが四月十二日　招魂社の桜を見て麹町の教会で植村牧師の説教を聞いた後、信子は失踪した。狂気の如く探して一週間後の十八日に京橋区采女町の浦島病院に入院の信子に面会して、彼のもとに帰るよう懸命に説得したが一切が空しく

四月二十四日　余と信子とは今日限り夫婦の縁　全く絶えたり。昨日信子に遇ひぬ。信子の本意全く離婚にあることを得たり。

本日午前　徳富氏を訪ふて相談の上離婚することに決し、其の通知書を認めて徳富君に手渡したり。

是に於て去年六月以後の恋愛も一夢に帰し了はんぬ。

斯くまで相愛したる信子。遂に吾と相離るるに至りたる事、極めて悲痛の事なれど、人の心の計り難きを思へば　これも詮なし。

余はもとの独身者となりたり。

失望・苦悩・傷心の独歩は徳富蘇峰の援助でアメリカ行きも計画したが、信子の慕情絶えず悶々の情を連日書

きつづけたが、漸く自己の過去と別れ、新生活の展望を見出した。

明治二十九年五月九日

欺かざる記の最初（二十六年二月）より今日まで三年三ヶ月と九日なり。

余が生涯はここに一変せざる可からず。

回想記を書く　苦悩を書く　日記を書く

独語して慰籍せんよりも、凡ての過去となして　一心不乱、前程に進むの生涯たらざる可からず

故に筆をこれに措き、此の記はここに閉じ了はることとなしたり。

望は前に在り、過去よ、去れ。

勉励と活動と計画と来れ

追想と低徊と独語と、去れ

国木田哲夫記

明治二十九年五月九日

独歩の銘記は、ここで擱筆された。

（四月七日　記）

逗子へは「さらば」を告げぬ。逗子にゆきたるは昨年十一月十九日にして、去りたるは本年三月二十八日なり。明記して置く。

と特筆してあるのは、何故だろう。

信子の背反など夢想だにしなかった新婚生活の楽園を刻印したかったのであろうか。

佐伯を出でて一年七ヶ月の波乱の足あとである。

（つづく）

旗返峠

畠返峠ともいう。宇目町上津小野と三重町奥畑の境にある峠で、一般地方道伏野宇目線が通る。標高五一一メートル。旗返の名は天正一四年（一五八六）の豊薩の戦いに由来するという。すなわち、この峠を大友軍の抵抗なく通過し、豊後に侵入した薩摩軍は翌一五年の退去では大友軍の追撃と、地元奥畑勢の襲撃をうけ、薩摩勢が旗を巻いて宇目町に退去したのでこの名があるといい、また、奥畑勢が旗を巻いて退去したとも伝える。

江戸期は殿様道ともいわれ、岡藩の御郡廻り（領内視察）、木浦鉱山の鉱物輸送などに利用された。『豊後国志』には、「畠返嶺」として、「宇目郷奥畠村の東にあり、山勢峻嶮、迂曲盤登一里余。下り亦一里余。官道岡より佐伯に達す」とある。また、西南戦争での薩軍の塁跡が残る。現在、峠にかかる道は荒廃しており、ほとんど利用されていない。（『宇目町誌』）